

天間に伝わる 親孝行な重介

昭和六十一年十一月五日号

よい子の皆さんは、家でお手伝いをしますか。昔、天間の重介という子供は、目の見えないお母さんと二人暮らしで、とてもよく働きました。今回は、重介少年のお話です。

母親思いの重介

昔、天間に重介という男の子がいました。二歳のとき、お父さんが病気で亡くなり、お母さんと二人で暮らしていました。

重介が六歳のころ、お母さんが突然重い病にかかり、目が見えなくなつてしまいました。重介はまだ小さいのに、お母さんの面倒をみたり、かわりの仕事もしなければならま

せん。近所の人は気の毒に思い、ときどき食べ物を届けてくれました。重介は、ほかの家の手伝いをして、お米やみそをもらい生活していました。

熱にもめげず働く

九歳のときです。重介は高い熱を出して働けなくなり、食べ物は何もなくなつてしまいました。

そのとき、目の見えないお母さんが、近所の人に助けてもらおうと外へ出かけようと思いました。それを見た重介は、お母さんを家へ連れ戻し、ふらふらしながらよその家へ行つ



て手伝いを始めました。

この様子を見た近くの人たちはいろいろなことで重介親子を助けてあげました。

昼は眞仕事をし、夜は田をいたわる重介のことが殿様に知れ、「お田さん思いの子だ」といつて、ほつびをくださったそうです。

親孝行はいいね

杉山辨作さん（天間南）

重介のお墓は、天間南にひっそりと建っています。すぐ隣に住む杉山辨作さんは、「江戸時代の年号が書いてある古いお墓で、戦後になつていわれを聞きました。お墓をまつる人もないのでうちでまつっています。親孝行はいつの時代でもいいことですね」と語つてくれました。